白木西原遺跡 I

福岡県八女郡立花町所在遺跡の発掘調査概要報告書

立花町文化財調査報告書

第7集

1994

立花町教育委員会

白木西原遺跡 I

福岡県八女郡立花町所在遺跡の発掘調査概要報告書

立花町文化財調査報告書

第７集

１９９４

立花町教育委員会

序

ここに報告する白木西原遺跡は、平成５年度団体営土地改良総合事業に伴い、平成５年９月から発掘調査を開始し、一応の調査を終えて中間報告書として作成したものです。

この地区は、矢部川に注ぐ白木川の下流右岸に位置し、古墳時代の古墳群を中心とした遺跡として、縄文時代から江戸時代までの貴重な資料を得ることができました。

本町におきましては、北山今小路遺跡の集落跡に引き続き、今回の西原遺跡の古墳群と大規模な調査が続いております。これもひとえに町当局、地権者の方々のご協力の賜物と心から感謝申し上げます。

これを機に、私たち一同、本町の埋蔵文化財に対して一層関心を深め、これらを愛護していきたいと念じる次第です。

最後になりましたが、発掘調査にあたりまして、南筑後教育事務所の伊崎先生をはじめ、発掘作業に携わっていただきました多くの方々のご指導、ご協力に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成６年３月31日

立花町教育委員会

教育長　　末 継 敬 一 郎

例言

1．本書は、立花町が平成５年度に国･県の補助金を得て発掘調査を行った白木西原遺跡の概要報告であって、立花町文化財調査報告書の第７集にあたる。

2．発掘調査は立花町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁南筑後教育事務所および文化課の援助を受けて実施した。

3．調査中の遺構については、実測は伊崎俊秋・吉田東明・平島隆夫・鵜木栄子・佐々木四十臣・清原ヤヨイ・馬場光子・中原恵美子・大塚恵治が行った。写真撮影は伊崎が行い、空中写真についてはフォトオオツカに委託した。

4．出土遺物の縄文土器の実測は水ノ江和同が行った。

5．遺構・遺物の図面の浄書は近藤美恵子が行った。

6．挿図における方位は新平面直角座標系のII系に基づく座標北である。

7．本書の執筆は、III－１の縄文土器についてを水ノ江が、その他を伊崎が行い、伊崎が編集した。

目次

I．　はじめに　……………………………1
II．　遺跡の位置と環境　……………………………2
III．　調査の概要　……………………………7
　1．I・II区の調査　……………………………9
　2．III区の調査　……………………………15
　3．IV区の調査　……………………………15
IV．　おわりに　……………………………15

Ⅰ．はじめに

立花町の白木西原地区を対象とした団体営圃場整備事業は昭和59(1984)年９月から地元推進が開始され、その後曲折を経ながら平成４年６月に至って土地改良総合整備事業として採択され、同５(1993)年度より工事に入る予定となった。圃場整備事業に関わる埋蔵文化財の試掘および協議等は事業実施前年度に行っており、この白木西原の平成５年度分についても４年度の秋に重機を用いて試掘したが、ビニールハウスやキウイフルーツの植栽があってごく僅かな部分しかできなかった。その時は、地表面下には明確な遺構は捉えられず、若干の縄文土器片を確認したにとどまったが、それ以外に顕在しているものとして古墳らしき高まり４箇所と石を組んで祀った所があったので、５年度に本調査を行うこととしていたのであった。調査は冷夏の過ぎた９月下旬から開始したが、当初の予想に反して多くの遺構が検出されたため年末までの３ヶ月余を費やした。調査終了まぎわの12月23日には現地説明会を行い、約70名の参加を得た。

調査期間：平成５年（1993）９月24日～12月30日

調査面積：約9000㎡

調査の関係者は次のとおりである。

立花町教育委員会	教育長		末継敬一郎
	社会教育課	課長	武田行夫
		課長補佐	原口輝義
		係長	久保俊治
		主査	岡崎知子
		主任主事	平島隆夫
福岡県教育庁	南筑後教育事務所 社会教育課	技術主査	伊崎俊秋
福岡県教育庁	文化課文化財保護室 調査班	技師	吉田東明

調査においては次の方々に種々ご指導・ご援助を受けた。深謝いたします。
佐々木四十臣（福岡県文化財保護指導委員）、西健一郎（九州大学文学部）、川述昭人・渡辺輝子（福岡県文化課）、赤崎敏男・大塚恵治・中川寿賀子（八女市教育委員会）、永見秀徳・小林勇作（筑後市教育委員会）、尾崎源太郎（広川町教育委員会）、田中康信（瀬高町教育委員会）、吹春茂（立花町史編纂委員会）、原美智子、平和美、野中栄子、梅野孝子、秋山幸子

また、調査中には町教育委員、北山小学校5・6年生70名、白木小学校5・6年生50名の野外現地研修があった。

［発掘調査従事者］

甲木　行雄・井上　幸雄・金子　正義・石橋　輝正・大城　治一・小川　忠郷・江崎　治吉
稗田　伝次・鵜木　栄子・清原ヤヨイ・原　初子・中原恵美子・馬場　光子・岡 レイ子
椛島ハルエ・大城　千秋・小柳テルヨ・石橋カオル・近見クニエ・鵜木　絹子

II．遺跡の位置と環境

（所在地）

福岡県八女郡立花町大字白木字西原

福岡県と熊本県を隔てる筑肥山塊の北側には、有明海に注ぐ矢部川の支流がいくつかあるが、の中流で、白木谷を北流してきて合流する白木川もその一つである。遺跡は白木川下流の右岸、矢部川に合流する所の1.7kmほど手前にある。ここは飛形山から伸びてきた丘陵先端のなだらかになった所を白木川が開析して河岸段丘としており、標高は40m前後を測る。白木川に沿って県道玉名八女線が略南北に走り、南は矢部谷峠を越えれば肥後国・熊本県三加和町に至る。遺跡の中心あたりで、国土座標系・II系のX＝18700m、Y＝－40900mほどである。

この白木西原遺跡で検出された遺構・遺物は、縄文時代早期・晩期、弥生時代後期、古墳時代、中世、近世という多岐にわたるものであったが、特に縄文時代早期・押型文土器期の石組炉とその周辺の包含層、縄文時代晩期の竪穴住居跡、そして古墳時代後期（５～６世紀）の群集墳が検出されたのは、この地域にとってきわめて重要なことであった。

以下には関連する時期の周辺遺跡について概観しておこう。立花町内の遺跡等に関しては既刊の報告書に概観しておいた[註1]のでそれを参照されたい。

縄文時代早期・押型文土器の出土する遺跡は古く岩崎光氏が筑後市裏山[註2]・長崎、黒木町黒木高校・田本、八女市立山、立花町小倉谷などを挙げられ、なかでも裏山遺跡の標高11mの台地上での発見は氏をしてモースの大森貝塚の発見に比すべき事件と言わしめている[註3]が、最近では八女市南部の低位段丘上でもいくつかの例が知られてきた。八女市国武[註4]、六反田[註5]、大坪[註6]、池上[註7]などがそうであり、大坪遺跡の石組炉34基は当遺跡との比較の上で興味深い。正式報告が待たれるところである。これ以外でも八女市立山山[註8]、広川町平原[註9]などで押型文土器が出土している。

縄文時代晩期では、矢部川南岸沿いにある立花町北山今小路遺跡[註10]では甕棺墓２基と包含層が調査された。北岸の平野部では今のところ晩期の例はないものの、八女市アモメ遺跡[註11]では後期の竪穴住居跡22軒が検出され石囲炉を持つものがあった。また矢部川を少し下った瀬高町権現塚北遺跡[註12]では多量の土器が出土し晩期の編年がなされている。なお、奥八女の星野村星野小学校遺跡[註13]でも竪穴住居群が検出され、良好な資料を得ている。

弥生時代については今回は土器のみの出土であったが、立花町北山今小路遺跡では後期～古墳初頭期の集落があって銅戈片などが出土した。そのときここは八女地方の当時の「クニ」の一部であったことを予測していたが、はたして最近になって八女市茶ノ木ノ本遺跡で後期の甕棺墓・石棺墓群から銅剣・鉄戈・玉類・方格規矩鏡などが出土しており[註14]、いよいよ「クニ」の内実に迫る資料が増えてきたといえよう。

古墳時代後期の群集墳は矢部川以南では立花町・瀬高町、以北では八女市、広川町に数多く築造されており、幾つかは発掘調査がなされ報告されている。瀬高町山内[註15]、八女市牛焼谷[註16]・童男山[註17]、広川町鈴ケ山・山の前[註9]・東山[註18]・上長延[註19]・植松[註20]などの古墳群は複室構造の石室を内部主体とし、６世紀後半以降に形成されたものであるが、５世紀代を含めてやや古い時期に築造が開始されたとみられ

1．白木西原遺跡
2．北山今小路遺跡
3．北山小学校遺跡
4．北山清浄田遺跡
5．六所宮古墳群
6．名木野古墳群
7．山内古墳群
8．川犬古墳群
9．本古墳群
10．立山山古墳群
11．アモメ遺跡
12．茶ノ木ノ本遺跡
13．柿園遺跡
14．権現塚北遺跡
15．山崎城跡
16．白木城跡

Fig. 1　白木西原遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）

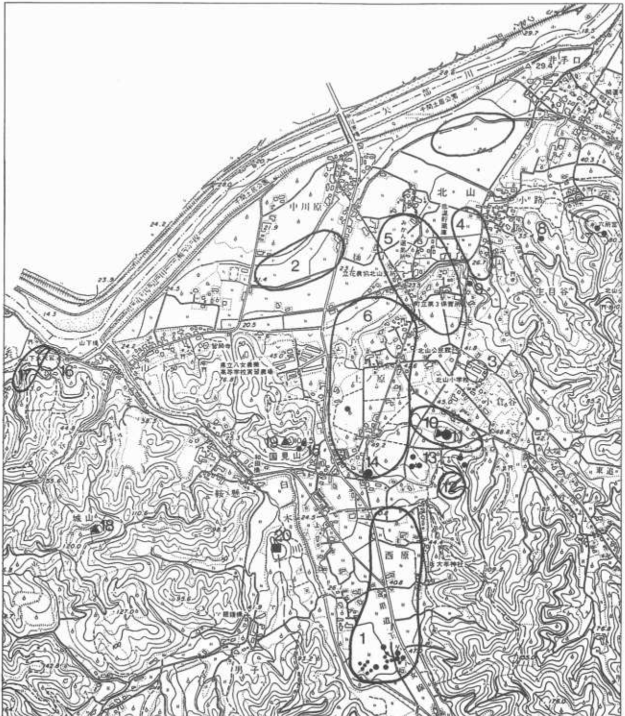
るものに瀬高町名木野[註21]、八女市立山山[註8]・東館[註22]、広川町平原[註9]などの古墳群がある。これらは当遺跡の古墳群を考察するうえで参考になるものである。立花町においては墳丘を持った古墳よりもむしろ横穴墓の方が多く築かれており、瀬高町を含めて県内でも有数の横穴墓地帯といえるが、そのうちの鬼隈[註23]・小倉谷[註24]の横穴群が調査されている。横穴式石室を持つ古墳群と横穴墓群の造営主体の階層差を解きあかしてゆくのには絶好の地ともいえよう。

中世期は北山今小路遺跡[註10]でも溝などが検出されている。この近辺で居館跡とされるような遺構は八女市柿園遺跡[註7]に13世紀中頃以降とされる環濠を見るが正式報告が未刊であるため詳細はわからない。そのほかにも鎌倉期以降の遺構・遺物は断片的に知られるもののまだ点的な状況である。山城についてはこの付近では調査例はないに等しいが、戦国時代の永禄年間に蒲池鑑廣が築き、のち天正15年(1587)の豊臣秀吉の九州平定後に筑紫広門が入城したという山下城跡は遺跡の西方にあり、また国見城が北方に、白木城が南方にある。[註25]

関ケ原の戦いの後に田中吉政が筑後一円33万1400石の領主となり、一里石を設置したり、灌漑・治水に力を尽くしたが，元和 6 (1620)年に田中吉政が死去すると、立花宗茂が柳川城主として矢部川以南の12万石を領有することとなり幕末に及んだのであった。この時代の考古学的知見はさほど多くないが、すぐ近くの男ノ子焼窯跡[註26]では陶器のほかに磁器も採集されている。おそらく江戸時代の開窯と思われ、窯跡の構造、製品の内容・流通等の解明は今後の課題である。

註

1. 立花町教育委員会『北山小学校遺跡』　立花町文化財調査報告書　第 5集　1993
2. 筑後市教育委員会『裏山遺跡調査概報』　筑後市文化財調査報告書　第 1集　1966
3. 岩崎光『八女・山門』　1967
4. 八女市教育委員会『八女南部圃場整備事業地内埋蔵文化財予備調査概報』　八女市文化財調査報告書　第 7集　1982
5. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報』　八女市文化財調査報告書　第18集　1989
6. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報 2』　八女市文化財調査報告書　第19集　1990
7. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報 3』　八女市文化財調査報告書　第23集　1992
8. 八女市教育委員会『立山山古墳群』　八女市文化財調査報告書　第10集　1983
9. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告III』　1972
10. 立花町教育委員会『北山今小路遺跡 I』　立花町文化財調査報告書　第 6集　1993
11. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報 4』　八女市文化財調査報告書　第29集　1993
12. 瀬高町教育委員会『権現塚北遺跡』　瀬高町文化財調査報告書　第 3集　1985
13. 星野村教育委員会『十籠星野小学校遺跡』　星野村文化財調査報告書　第 2集　1994
14. 八女市教育委員会の中川寿賀子・赤崎敏男氏の御教示による。
15. 瀬高町教育委員会『女山・山内古墳群』　瀬高町文化財調査報告書　第 2集　1982
16. 八女市教育委員会『立山山古窯跡群ー八女古窯跡群調査報告IV・総集編ー』　八女市文化財調査報告書　第 5集　1972



1．白木西原遺跡
2．北山今小路遺跡
3．北山小学校遺跡
4．北山清浄田遺跡
5．北山遺跡
6．上ノ原遺跡
7．六所宮古墳群
8．小路古墳
9．今出坂古墳
10．小倉谷遺跡
11．茶臼塚古墳
12．小倉谷横穴群
13．茶臼塚古墳群
14．大塚１号墳
15．上ノ原古墳群
16．山下遺跡
17．山下横穴群
18．山下城跡
19．国見城跡
20．男ノ子焼窯跡

Fig. 2　白木西原遺跡位置図（約1/14,000）

Fig. 3　白木西原遺跡調査区位置図（1/4,000）

17. 八女市教育委員会『童男山古墳群』　八女市文化財調査報告書　第13集　1983
18. 広川町教育委員会『東山古墳群』　広川町文化財調査報告書　第 1集　1981
19. 広川町教育委員会『上長延古墳群』　広川町文化財調査報告書　第 4集　1985
福岡県教育委員会『瀬高地区遺跡；上長延古墳群』　福岡県文化財調査報告書　第74集　1986
20. 広川町教育委員会『植松古墳群』　広川町文化財調査報告書　第 6集　1988
21. 瀬高町教育委員会『名木野古墳群』　瀬高町文化財調査報告書　第 1集　1977
22. 八女市教育委員会『東館遺跡』　八女市文化財調査報告書　第25集　1993
23. 立花町教育委員会『鬼隈横穴群』　立花町文化財調査報告書　第 3集　1987
24. 立花町教育委員会『小倉谷横穴群』　立花町文化財調査報告書　第 4集　1991
25. 立花町教育委員会『立花町の文化財』　1989
26. 浅野陽吉『筑後陶瓷考』　1944

Ⅲ. 調査の概要

今回の調査はⅠ区からⅤ区に分けて行ったが、この区分けはあくまで便宜的なものであって、基本的には削土部分と道路・水路部分についてを調査対象とした結果である。Ⅰ区・Ⅱ区はFig.4に示すように古墳群があり、Ⅴ区は何も遺構がなかった。また、Ⅱ区の東側、県道より一段高くなった所に遺構確認の試掘壙を入れたが、ここには時期不詳の溝2条が存したのみであった。遺構実測図・遺物ともにまだ整理が終わっていないので、いまはその内容について十分に述べられない。以下には現時点で把握していることを時代ごとに列記する。事業対象地区(Fig.3)の北半部については平成6年度の施工予定であり、ここも埋蔵文化財の調査が予定されている。

なお、遺構検出面で時期不詳の石器としてプロピライト製の礫器数点が見られた。これは山門郡から八女郡にかけてよく見られる石器であるが、層位的把握はできていない。

今回の調査で検出された遺構は次のとおりである。

〈Ⅰ・Ⅱ区〉

・古墳	17基	・石棺墓	7基
・焼土壙	5基	・竪穴住居跡（縄文時代晩期9、古墳時代5）	14軒
・掘立柱建物跡［SB］	3棟	・溝［SD］	2条
・縄文時代早期石組炉	1基	・柱穴［P］	多数
・近世墓	9基		

〈Ⅲ区〉

・溝［SD］	2条	・柱穴［P］	少数

〈Ⅳ区〉

・掘立柱建物跡［SB］	2棟	・土壙	3基
・柱穴［P］　多数			

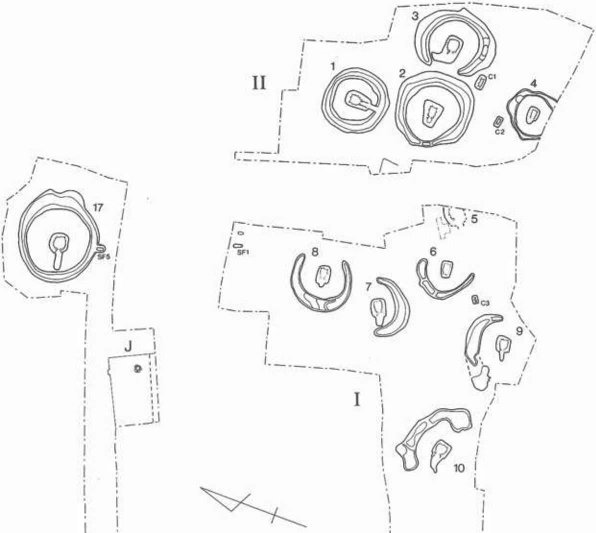


Fig. 4　白木西原遺跡Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図（1/800）

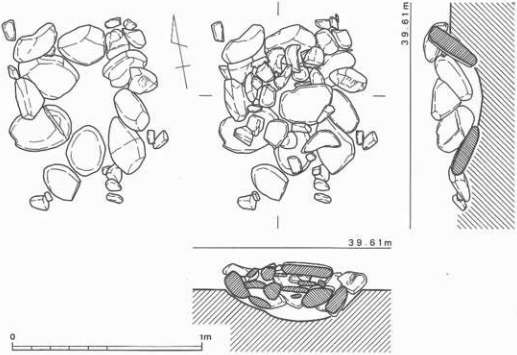


Fig. 5　石組炉実測図（1/20）

1．Ⅰ・Ⅱ区の調査

◎　縄文時代早期（PL.13、Fig. 5・6）

Ⅰ区東半部の5～10号墳、17号墳の周辺には黄褐色土中に押型文土器や黒曜石片が散布していたが、特に17号墳の南西方は密に分布するとともに黒曜石・サヌカイト原石も見られたので、ここにJ区として約9×14mの長方形グリッドを設定して30cmほどを掘り下げた。この範囲内でも東半部に遺物が集中し、かつ石組炉も検出された。グリッド南壁の土層を見ると茶褐色系の土の入った落ち込みがあり、あるいは竪穴住居跡等が存したのかも知れない。約350点のナンバリングした遺物のうち70点ほどが押型文土器で、他は黒曜石片が最も多く、サヌカイト、石英質剥片もあった。叩石も30点ほどある。押型文土器は楕円・山形・格子目がある。

他に採集された土器に円筒形条痕文土器が数点あり、以下に押型文土器を含めて17点を紹介する。

縄文J区遺物出土状況

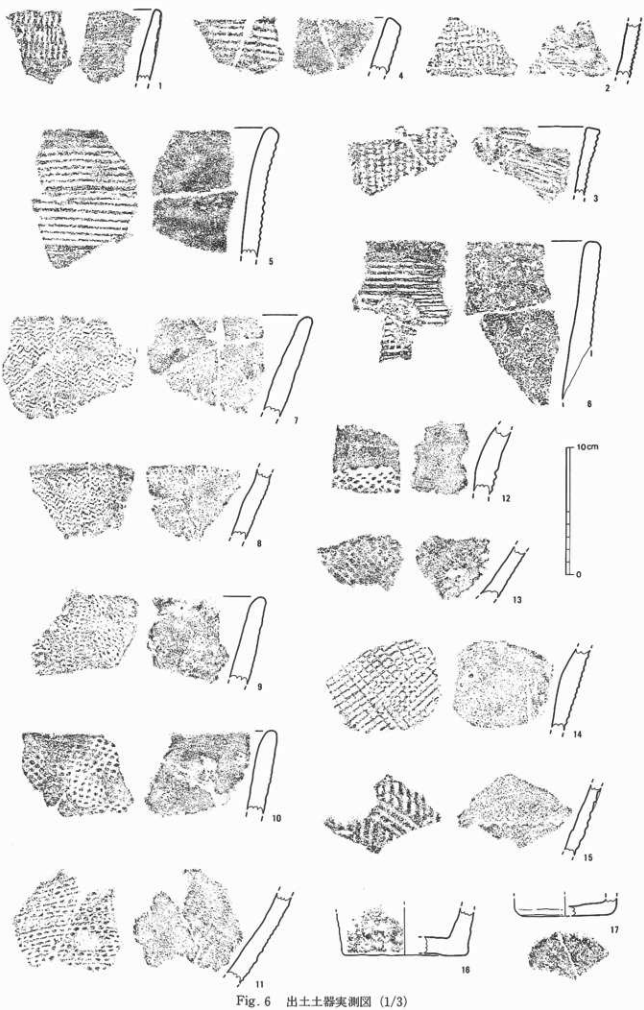


Fig. 6　出土土器実測図（1/3）

縄文土器（Fig. 6）

2·7～17はJ区からの出土、1·3～6は別地区からの出土であり、貝殻円筒形土器と押型文土器には年代差が存在しそうである。器面調整にはおよそナデが施されるが、2・3に限って内面に二枚貝条痕が施される。1は二枚貝の腹縁による刺突文。2は二単位、3は五単位の原体（不明）による押引文。4～6は六単位前後の原体による条痕文で、施文後に指で押さえるために、部分的に押引文状に見えるところもある。7·8は山形押型文、9～13は楕円押型文、14は格子目押型文。15の内面には山形押型文が施され、外面には刺突文と沈線文が施される。口縁部付近の破片であろう。16・17は平底の底部であるが、これらは押型文土器の底部ではなく、1～6の貝殻円筒形土器の底部である可能性が高い。11や13から判断して、押型文土器の底部は尖底もしくは潰れた感じの丸底であったと考えられる。

◎　縄文時代晩期

（PL.9、Fig. 7）

I区の西半部、11号墳の墳丘下において土器と石器が採集され、また12号墳の下層からは竪穴住居跡が検出された。その9軒の住居跡は全て方形および長方形プランであるが、柱穴の配置は規則的とは言い難い。2号住居跡には中央よりやや西寄りに石囲炉が造り付けてあり東側半分のみ残存していた。晩期前半期の住居群である。土器のほかに打製石斧・打製石鏃・十字形石器・磨石などが出土している。

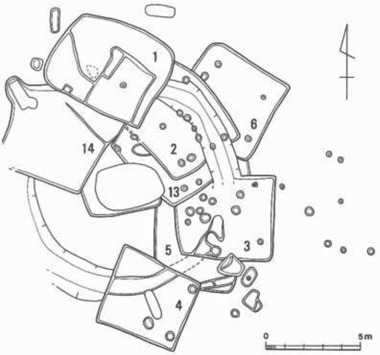


Fig. 7　縄文晩期住居群（1/200）

◎　弥生時代後期

II区の北東部にてこの時期の土器が少量出土した。住居跡等の有無は確認できなかったが、近くに存するのかもしれない。

◎　古墳時代

この遺跡の主体をなす時期である。古墳17基、箱式石棺墓7基、焼土壙4基、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟があった。

a．古墳群（PL.2～11、Fig. 4・8・9）

I区に13基、II区に4基の古墳が存した。発掘調査に入る前は一帯が水田であり、その中で畦畔や地境いなどに小石を積み上げたり、立石や石組みをした所が4箇所ほど見られた。それについて

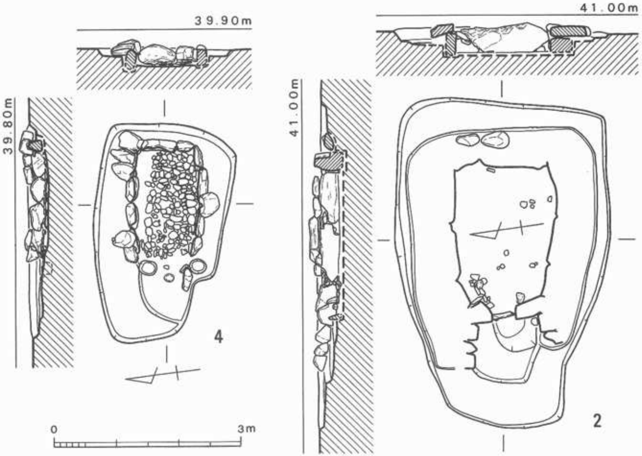


Fig. 8　2・4号墳石室実測図（1/60）

も古墳と認識できるような状況ではなかったが、まずは、ここで5号墳としている古墳の石室の一部が確認されるに至って、にわかに群集墳の存在が注意されることとなったのであった。調査を進めている途中で、地元の人が「このあたりにも'塚'があった」と言われた所の表土を除去すると果たして古墳が現れるというように、結果としては水田の床土の下から石室の床面に近い基底部と周溝が次々と検出され17基を確認したのであった。

これらの古墳群は占地のうえからは1～10号墳、11～16号墳、17号墳の大きく3グループに分けられるように見えるが、時期的に見れば前二者の中でそれぞれ変遷が辿れるようである。出土土器や石室形態等を検討してゆけば築造の過程がおさえられるものとみられる。調査時の判断では、5世紀末を最古とし、6世紀中葉に近い前半期までに築造され、一部に6世紀後半代まで追葬されたものがある、というものであった。

周溝は完全に囲繞するものと一部のみ巡らせるものとがある。通常は傾斜地に築かれた古墳では高い方にのみ溝を持つものがままあるが、ここの場合は例えば7号墳などは、先に8号墳が存したために南側の低い方にのみ溝を掘ったことが考えられる。基本的には全て円墳であろうが、6・9・11号墳等は周溝が角張っていて方形墳であった可能性も否定はできない。

主体部は遺存状態がよくないが、竪穴系横口式石室と横穴式石室とがある（Fig.8・9・11）。横穴式石室は全て単室であり、ほとんどが墓道を斜めに掘り込む古式の形態をとるが、1号墳のみは墓道が周溝にまで接続していた。3号墳は墓道が折れ曲がっているがこれは先に造られていた2号

墳の墳丘が目前にあったためにわざと曲げたものであろう。竪穴系横口式石室は長方形プランであるが、やや胴張りをもったものもあり、横穴式石室はほとんど全てが胴張りを有する。

出土遺物としては、ほとんどの古墳の周溝から量の多少を問わず土師器が見られ、一部に須恵器の出土したものがある。石室内からは鉄器として鏃・斧・刀子・馬具、装身具として耳環・管玉・ガラス玉・土玉・水晶玉などが見られた。

古墳のほかに、それに従属していたと思われる箱式石棺墓と焼土壙があるが、特に後者のＳＦ３と５はそれぞれ12・17号墳の周溝を張り出すようにして築かれていた。土壙墓のような形状であるが、壁面が強く焼け、床面に炭化物があることからすれば墓とは考えにくい。

b．集落（PL.1・3、Fig.4）

Ｉ区の北西部には古墳はなく、住居跡・建物跡があった。竪穴住居跡は５軒あって６世紀後半代とみられたので、一部は古墳に追葬が行われている頃に営まれていたらしい。竪穴住居を造営した時には目の前に古墳群がすでに鎮座していたことになり、その占地形態も注意されよう。建物跡は３棟あるが、これらは一時期の所産ではない。ＳＢ１は総柱の倉庫である。

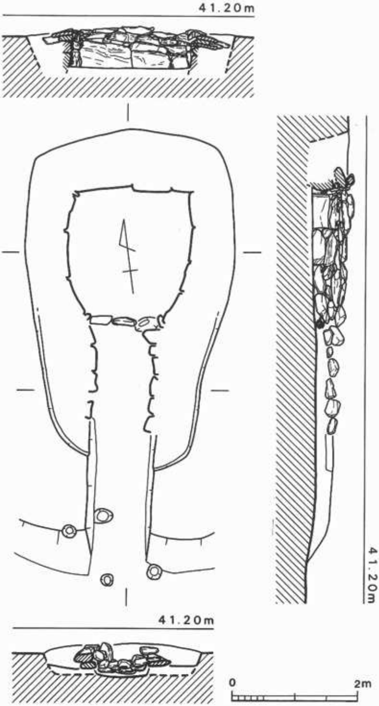


Fig. 9　１号墳石室実測図（1/60）

◎　中世

17号墳の石室内埋土中から青磁破片が出土しているので、鎌倉時代の頃に盗掘があったのだろう。Ⅲ・Ⅳ区の建物跡などと関連があるとみてよい。

Fig.10　Ⅲ区・Ⅳ区全体図（1/400・1/200）

◎　近世（江戸時代）（PL.9、Fig.4）

Ⅰ区の西半部、13・14号墳を切って墓地が営まれている。狭い範囲内に9基が密集していた。それらは残存していた石室とあまり変わらない高さで築かれているので、少なくとも13・14号墳については江戸時代前期には墳丘の大半が削平されていたことになる。墓のつくりは素掘りの壙内に桶棺か木棺を納め、埋めたあとに礫石を巡らせて囲み、その上に墓石を立てたものらしい。墓石には元禄2年(1689)と享保18年(1733)の年号を刻んだものがあった。元禄2年の墓石にはその側面に「白木村 施主 上妻 儀右衛門　俗名 山口六助」とある。なお、12号墳西側の調査区外にもまだ墓石が立っており、寛文・享保・貞享・万治などの年号が刻まれている。

遺跡東方の丘陵上から八女、久留米方面をのぞむ

2．Ⅲ区の調査（PL.14、Fig.10）

溝と柱穴があったのみである。溝からは青磁破片等が出土しているので中世の所産である。Ⅳ区にこの溝の続きは検出されていないが、時期的には関連するものだろう。

3．Ⅳ区の調査（PL.14、Fig.10）

掘立柱建物跡２棟と土壙・柱穴がある。

ＳＢ１は梁行２間に桁行２間以上、ＳＢ２は２×３間の建物である。土壙は長方形や溝状のプランがある。これらは出土土器から中世のものであり、当該地の北西方に存した山下城などと無関係というわけでもなかろう。

Ⅳ．おわりに

白木西原遺跡における今回の調査の主な成果は、①縄文早期・押型文土器と石組炉、②縄文晩期竪穴住居群、③古墳時代後期の群集墳、としてよいであろう。全てについて詳細は本報告に譲るが、ここでは③の古墳時代に関して若干の見通しを述べておきたい。

筑後地方に限らず、群集墳といえば６世紀後半代以降の複室構造の石室を主体部とするものが大多数を占める中で、この古墳群は５世紀末から６世紀中葉までの間に形成され、一部が６世紀後半

調査地点遠景（東から）

代まで追葬を見るというものであった。爆発的な数で築造される後期群集墳の先駆けともいえるあり方であって、特に時期的な背景が注意されるところである。

この古墳群から北に1.5kmで矢部川があり、それを渡って4kmも行けば八女丘陵がある。５世紀末から６世紀中葉といえば、まさに筑紫君磐井がその寿墓たる岩戸山古墳を八女丘陵上に築造し、そして大和政権の継体王朝と戦って敗れたという時代の節目の時期にあたっている。当古墳群の被葬者たちも矢部川南岸にあるとはいえ筑紫君磐井と無関係であったとは思われない。それが具体的にどのような関係であったかについて、石室構造や出土遺物の分析からどこまで迫り得るかは今後の重要な検討課題である。

ここでは竪穴系横口式石室と横穴式石室とが混在しているということも石室の変遷過程を探る上で貴重である。まだ出土土器等が未検討なので確言できないが、４・６・８・12・13号墳あたりが初期に築造され、次いで２・９・11・14号墳、７・15・16号墳、そして３・10・17号墳、１号墳といった流れになるようである。１号墳には６世紀後半代の須恵器が出土しており、床面が二重になっていたことからも追葬があるのは間違いないが、他の石室では明確な追葬が捉えられなかった。また６世紀後半の時期にはすぐ近くの小倉谷横穴群の築造が始まっている。小倉谷横穴群では肥後タイプ石室の系譜を引く玄室プランを持つものがあるというが、当古墳群には屍床も見られなかった。横穴墓群と墳丘のある古墳とが同じ時期にそう遠くない位置でみられることの社会的背景の分析など、今後検討すべき課題は多い。

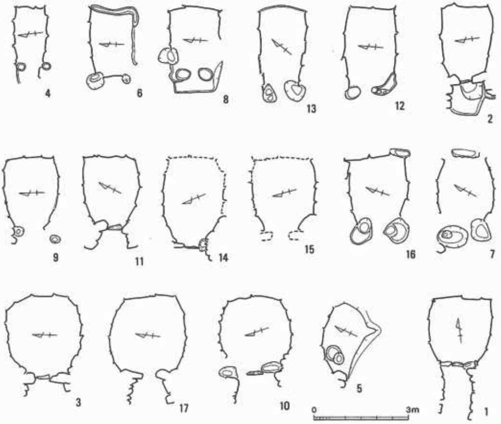
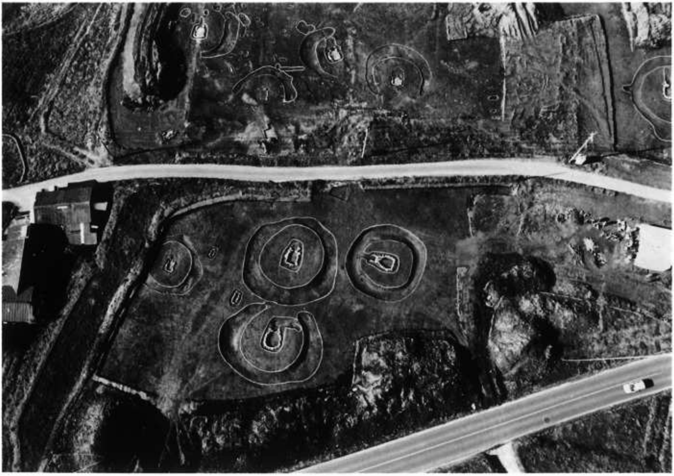


Fig.11　石室プラン図（1/120）

図　版

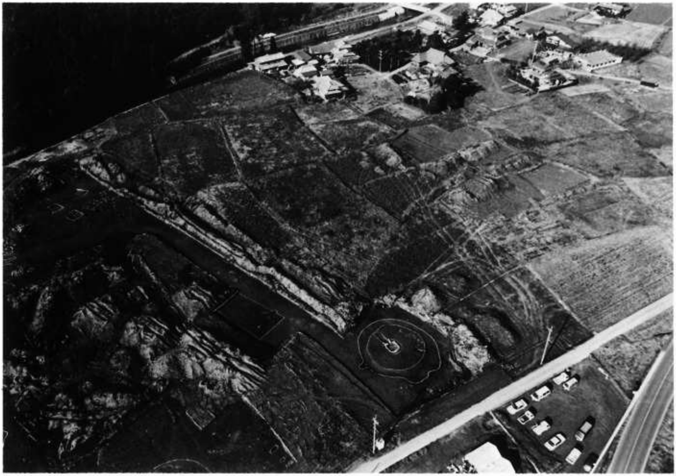
1．白木西原遺跡空中写真（北東から）　　2．Ⅰ区全景（東から）

1．Ⅰ・Ⅱ区 1 ～10号墳（北西から）



2．Ⅱ区 1 ～ 4 号墳（東から）

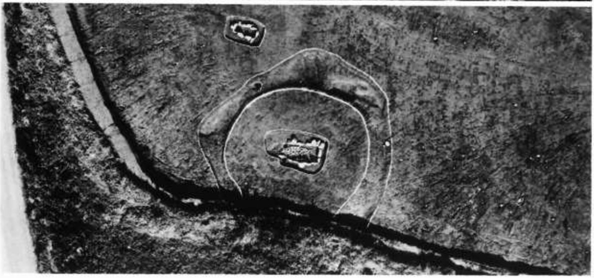
1．Ⅰ区西半部（北東から）



2．Ⅰ区北半とⅢ・Ⅳ区（南東から）

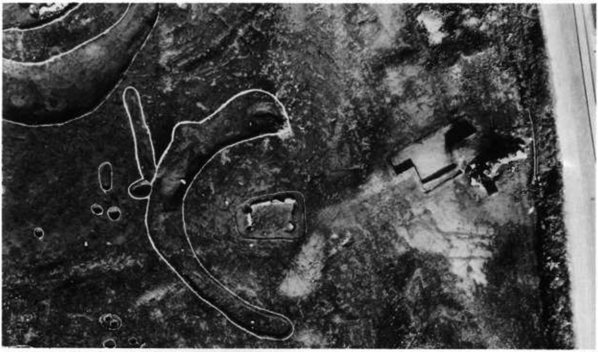
1. 1号墳

2. 2・3号墳



3. 4号墳

1．5号墳
発掘前



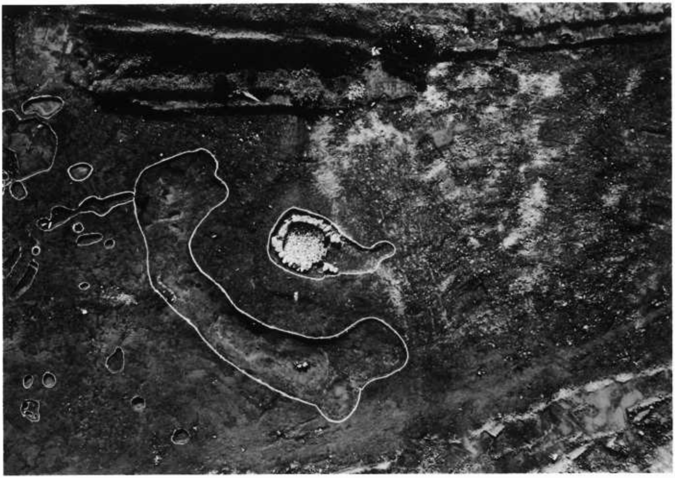
2.
5・6号墳

3．7号墳

1．8号墳

2．9号墳

3．
9号墳石室



1. 10号墳

2. 10号墳石室

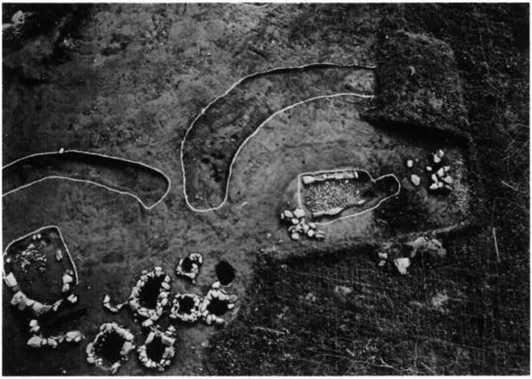
1．11号墳
発掘前

2．11号墳

3．11号墳
石室

1.
12号墳と
縄文晩期
住居跡

2.
13・14号墳
発掘前

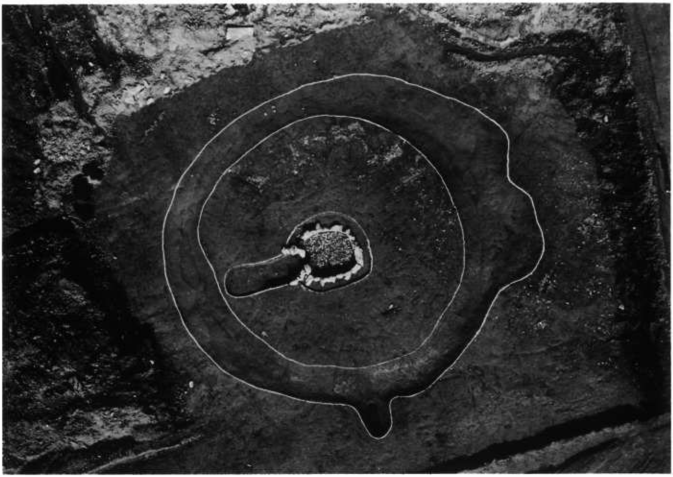


3.
13・14号墳
と近世墓

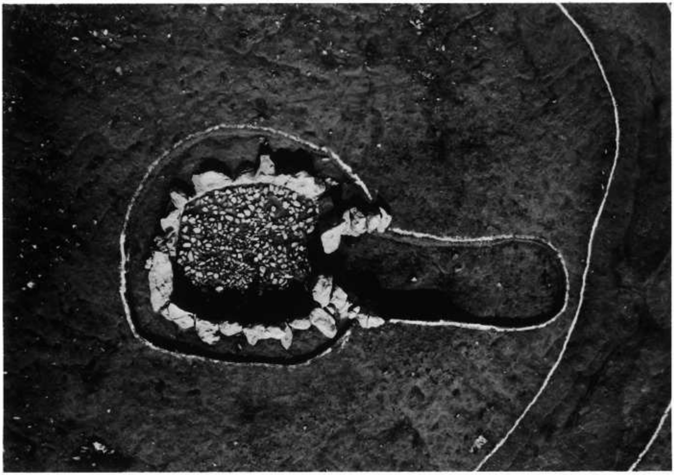
1. 14号墳と近世墓

2. 15号墳

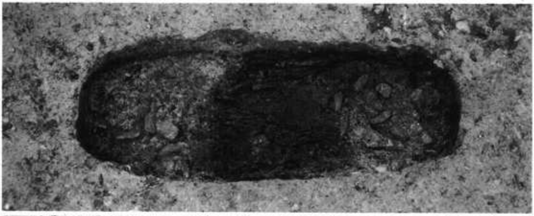
3. 16号墳



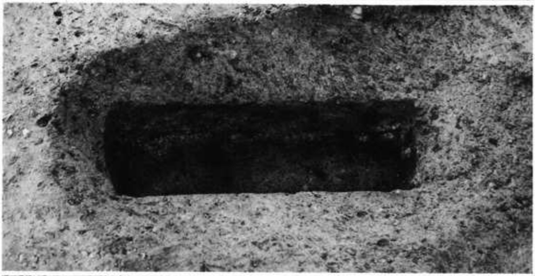
1. 17号墳



2. 17号墳石室



1. SF 1



2. SF 3

3. SF 4

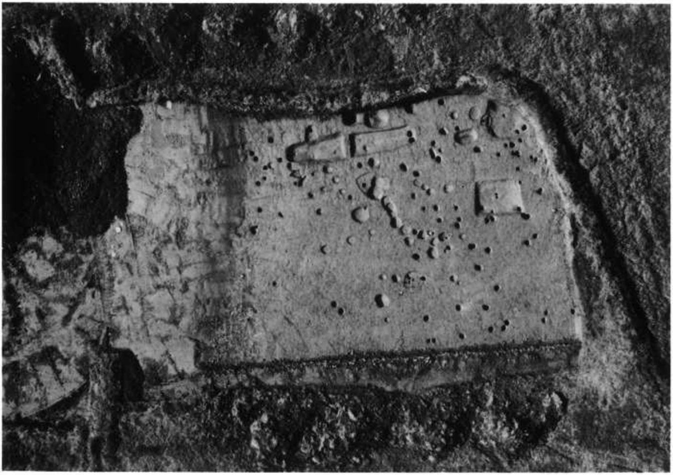
4. SF 5

1. 石組炉

2.
石組炉の
石組

3.
黒曜石・
サヌカイト
原石
出土状態

1．Ⅲ区全景（東から）



2．Ⅳ区全景（東から）

報告書抄録

ふりがな	しらきにしばるいせき
書名	白木西原遺跡Ⅰ
副書名	
巻次	
シリーズ名	立花町文化財調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	伊崎俊秋
編集機関（発行機関）	立花町教育委員会
所在地	〒834 福岡県八女郡立花町大字谷川1130　Tel 0943―23―5141
発行年月日	西暦　1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
白木西原	福岡県八女郡立花町大字白木字西原	405434	720233	33度 10分 4秒	130度 48分 43秒	19930924 ～1993120	約9000	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項
白木西原	古墳	縄文時代早期	石組炉	1基	押型文土器・石鏃・叩石	縄文早期押型文土器は楕円・山形・格子目とそろっている。
	集落	縄文時代晩期	竪穴住居跡	9軒	土器・十字型石器・石鏃	
	墓地	弥生時代			土器	
		古墳時代	古墳 石棺墓 焼土壙 竪穴式住居跡 掘立柱建物跡	17基 7基 5基 5軒 3棟	須恵器・土師器 鉄器・玉類	古墳群17基は5C末～6C中に築造されたもの
		中世	掘立柱建物跡	2棟	土師器・青磁	
		近世	墓地	9基		

白木西原遺跡Ⅰ

立花町文化財調査報告書

第7集

1994（平成6）年3月31日

発行　立　花　町　教　育　委　員　会

福岡県八女郡立花町大字谷川1130

印刷　赤　坂　印　刷　株　式　会　社

福岡市中央区大手門1丁目8―34

電話　092（751）7431